

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？  
—こどもの物語と聖書に見られるくしょうがい者>差別—」  
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—」  
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)

目 次

宗教の意味…………… 大宮 有博 (2)

パン五つと魚二匹しかありません…………… 金 性 済 (5)

ある高校生の生涯が語りかける…………… 森 田 喜 之 (9)

新入生の皆さんへ…………… (14)



# 宗教の意味

大宮有博

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

(旧約聖書 出エジプト記 20章2～3節)

この大学はキリスト教主義の大学であります。ここにいる皆さんのほとんどの方は、宗教についてよく分からないとか、自分には関係がないからあまり考えたことがないと思っているでしょう。あるいは、怖いイメージさえ持っている人もいられるかもしれません。宗教は、皆さんの日常生活をあらためて振り返ってみると分かるように、意外と私たちの生活の身近なところに存在します。また宗教を大切に生きている人々、キリスト教に限らず、神道や仏教などを信仰している人が皆さんの周りにもいることでしょう。宗教にはおおそ二つの意味があると私は考えております。第一に新しい未来を拓くこと、第二に新しい価値に自らを招くこととあります。では、第一の新しい未来を拓くこととは一体どういうことでしょうか。

私たちは自分の未来に何が起こるのかは、もちろん誰も予測できません。そういった何が起こるか分からない不安定な状況を、人間はとても恐れる傾向があります。その状況に真正面から向き合うことを避けよう

としてしまいます。具体例を二つ挙げてお話しします。

皆さん環境問題には詳しいでしょうか？このままCO<sub>2</sub>を排出し続けると近い将来、大変なことになるというのは、だれもが繰り返し耳にしている懸念すべき周知の事実であります。この未来を阻む環境問題は私たちの取り組み次第で防ぐことはできるのですが、一生懸命それを食い止めようとして実行に移している人は、この中で一体どれくらいいるでしょうか？案外少ないと思います。むしろ分かっているながらも、あまり考えないようにしておこうと後回しに生きている人がほとんどだと思います。それからもう一つ、これから皆さんの身の上に通じて必ず起こることといえば‘死’であります。死について真剣に考えたことはありますか？なかなかこれも、あまり身近にない事柄として脇においてしまっている人がほとんどであります。宗教は私たちに知らない未来を指し示し、その未来に私たちが正面から向き合うよう教え導いてくれます。例

えば、キリスト教では‘神の国’という言葉を使って未来を指し示すことがあります。人間がこうあって欲しいと願う未来ではなく、神が望む未来を示すものが、キリスト教の説く神の国であります。また、キリスト教は、私たちがあまり目を向けられない死に対しても‘復活’という未来を示しています。神は‘人間がただ死ぬことを望んでいるのではなく、死んでも復活することを望まれている’と聖書は教えています。それゆえに、神はイエス・キリストをこの世に送ったと聖書が証しているのです。このように宗教は神が未来に何を望んでいるかを示すことで、人間に未来と向き合うことを求めているのです。そして、未来にしっかり向き合うことができる人は、今生きている現在を変えることが可能な人とも言えます。

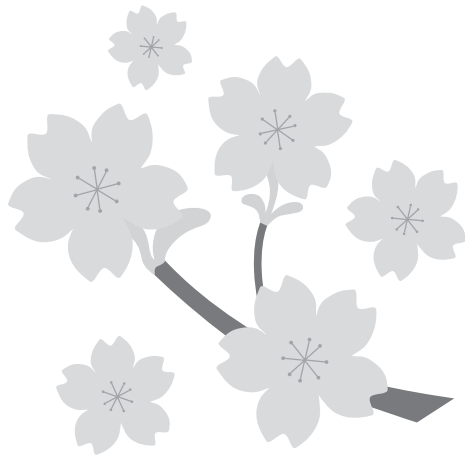
第二の宗教の意味として、新しい価値観に自らを招くことが挙げられます。これは、今まで大切にしていたことが大切になり、大切にしてきたものが大切にならなくなるということを示しています。皆さんにとって自分の命は大切だと思っておりますか？また自分の命と同様、他人の命も大切だと思っておりますか？近年、この問いの関しての答えが非常に曖昧になってきているように思います。よって、自分が否定されてしまうと、逆上して他を攻撃して殺めてしまうことでしか、自分の存在や生きていることをアピール出来ない人が

しばしば出てきてしまっています。宗教は、日に日に軽くなっていく私の命、そして他人の命が極めてかけがえのないものであることを、あらためて私たちに教えてくれます。

もう一度申し上げますが、宗教は私たちに新しい未来を拓いてくれ、また新しい価値観を提示してくれます。しかし、宗教にも注意しないといけないものがあることを、少し忠告しておきたいと思っております。それは、私たちを束縛する宗教です。例えば、教えの中で「あなたは〇〇なことをしないと救われません」と謳って何かさせようとしたり、ノルマを課してきたりします。あるいは「私の言うことには絶対に従わないといけません！」と、その宗教のリーダーが要求するものも現に存在しています。先週、皆さんの携帯やCCSのアドレスに宗教勧誘に注意して下さいと案内が送信されたのをご存知かと思いますが、この大学のキャンパスでも近頃、活発に勧誘している団体があります。何れの団体もキリスト教の一派であることに変わりはないのですが、名古屋学院大学が建学の精神としているキリスト教とは、ずいぶん異なる点が多いものであります。こういった団体は自分たちが宗教団体であることを伏せて、ただお茶を飲むサークルのように偽って誘ってきたり、あるいは一時間以上もかけて学生を強引に勧誘したりします。つまり、この団体は皆さんを解放するためではなく、束縛するためにあ

る宗教と言わざるを得ません。今日の聖書箇所であります、出エジプト記の20章2節～3節は、今から3500年以上前、エジプトから脱出した奴隷の民が、新しい民族のアイデンティティとしての宗教を創るにあたって定めた、道徳の規定である十戒の導入部分です。ここで神は「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」と述べています。彼らイスラエルの宗教は、自分たちを奴隷から解放した神を崇める宗教なのであります。そして次の節では、それ以外の神

(おおみやともひろ 商学部准教授 2010.7.20 チャペルアワー奨励)



には仕えないと宣言しています。つまり、彼らは自分たちを解放した宗教にのみ仕え、束縛するような宗教には今後いっさい仕えないというマニフェストをここで述べているのです。

宗教とは本来、人々を解放するものであって、束縛するものではありません。現在もまたそうであって欲しいと望んでいます。そして、もしも将来、皆さんが何らかの宗教を選択する機会が訪れたときには、あなた自身を解放してくれる宗教かどうかを是非しっかりと見極めて、その道を歩んでいって欲しいと願っております。

## パン五つと魚二匹しかありません

金 性 濟

イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた所に退かれた。しかし、群衆はそのことを聞き、方々の町から歩いて後を追った。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた。夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買に行くでしょう。」イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」イエスは、「それをここに持って来なさい。」と言い、群衆には草の上に座るようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。弟子たちはそのパンを群衆に与えた。すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。食べた人は、女と子供を別にして、男が五千人ほどであった。

(新約聖書 マタイによる福音書 14章13～21節)

新約聖書の中には、イエスが語られた言葉や、なされたさまざまな御業が記されています。その中で注目すべきことは、イエスが驚くべき数々の奇跡を行われたことです。その奇跡の代表的な出来事が、今日お読みいたしました聖書箇所であります。たったパン五つと魚二匹を、なんと5千人の人々が分かち合ったと述べています。

イエスが人々に話をされ日が暮れた頃、弟子たちは聴衆を帰そうとしますが、イエスは「帰してはいけない、あなたたちの手で食べさせてあげなさい」と諭します。その瞬間、弟子たちは「私たちの先生は何をおっしゃっているのか」と反発心を抱いたことでしょう。そこで、「ここには私たち12人と、先生と合わせて13人が食べられるパン五つと魚二匹しか

ありません」と主張しました。イエスは次の瞬間、「それらをここに持ってきなさい」と述べ、弟子たちはそれに従いそれらを差し出しました。イエスはそれを受け取り、天に向かって賛美の祈りを唱え、もう一度そのパンを弟子たちに渡し、そして弟子たちの手によって人々に配られました。

配れども配れどもそのパンは尽きることなく、しまいには人々が食べ残したパン屑が12籠にいっぱいになったと、驚くべき状況が記されています。私たちにどうてい信じられないフィクションとしか思えません。しかし皆さん、私たちの生きるこの世界で、そして私たちが歩んできた歴史の中で、このようなたったパン五つと魚二匹しかない現実から多くの人々のお腹が満たされた奇跡のような出来事は、何度も起こってきたのです。

今日の聖書のお話しの秘密は一体どこにあるのでしょうか。17節をみると、イエスの指示を疑問に思った弟子たちが「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」と述べていますが、この簡単な一つの言葉に大切な意味が隠されています。まず‘ここには’とはどこでしょうか。それは、私たちの手の中であり、主観的に、自分の目で観てという意味です。自分中心にこの現実を見たときには……とも言い換えられるでしょう。そして、パン五つと魚二匹とは何を指すでしょうか。それは、‘もう隠しようのない事実’であります。貧しく、小

さくて弱い、足らない事実、現状です。私たちは直視しなくていけない事実をたくさん抱えています。そして最後の……しかありませんというのは、果たして事実でしょうか。それは事実でも真実でもないのです。

次の瞬間、イエスは「ここに持って来なさい」と、同じく‘ここに’という言葉が使われました。イエスが述べる‘ここに’とは、‘私(=イエス)の手の中に’ということであります。「あなたがたは自分中心に現実を見ていたかもしれないが、それを移しかえて私の手の中に、つまり私の可能性、展望の中に、私が実現しようとしている未来の中に託してみなさい」とイエスは言及しているのです。そして、この瞬間が大事だったのです。弟子たちはその言葉によって反発心を省み、主観的にここにあるだけの物や貧しい現実を、イエスに委ねようと思いを改めたのです。自分中心の観察眼ではなく、イエスを中心にすべてを委ねようという思いを新たにしました。そして、イエスは受け取ったわずかなパンと魚を天の父なる神に委ね、賛美の祈りを唱えました。「天の父なるお父様。ここにはパン五つと魚二匹しかありませんが、あなたのみ手から私はこれを受け取り、もう一度弟子たちに委ねます」。イエスはきっとそのように祈られたことでしょう。そして、それらは多くの人の手に配られお腹を満たしたのです。

私はこの奇跡を読むたびに、一人の方を思い出します。星野富弘さん

というクリスチャンで、障害をもった詩人であり画家です。この方は1970年中学校の教師としてトランポリンをしていた時に、まさかさまに首から床に転倒してしまい、頸椎損傷で首から下が麻痺してしまったのです。その後、彼は絶望のどん底の中で「自分の体は首から上しか動かない」と自分の人生を悲観していました。ところが、教会の牧師たちが星野さんを訪問し、励ましていくうちに、彼は自ら筆をくわえて絵を描き始めました。そうしてたくさん作品を描いて、神からの大いなる恵みを体験することになるのです。彼はその事故が起こって以降、4年後の1974年にクリスチャンとなり、「首しか動かない私ですが主よ、あなたのみ手に委ねます」と、回心します。

彼のしたための詩は口で描く絵と共に、日本全国の多くの人々の心を捉え、さらに英訳されて世界中の多くの人々に読み継がれ、感動を与えて作品となりました。首しか動かない私を、「ここに」、つまり絶望する自分にではなく、イエスのみ手の中に一度委ねてみたときに、多くの人々が心揺さぶられ、慰められ、励まされ、満たされるような奇跡がおこったということでもあります。

私が今奉仕しております名古屋教会も、今から80年前、わずかに数名の人が朝鮮半島から日本に渡り、低賃金で過酷な労働で貧しさを強いられていた生活の中で、カナダ人牧師L.L.ヤング宣教師との出会いによって真理

を見出し、長く貧しい道のりを経て、今では立派な教会としての活動を出来るまでに至ることができました。さらに今では、名古屋の駅前に場所を与えられて、60名の子どもを預かる保育所、そして60名の高齢者の介護に携わる老人ホームをも運営するまでに広がりをもてました。「たったパン五つと魚二匹しかない」といった貧しい現実からキリストのみ手を通して多くの人びとが満腹した奇跡の出来事は、かつての名古屋教会の信者の方々の、貧しくともキリストに身を委ね、聖書の教えを通して心満たされていた姿に重ねてみるることができます。

皆さんも、よく自分を振り返ってみましょう。自分の前に立ちほだかる逆境を前に、「どうせ自分は……しかない」と、自身の能力や可能性を狭めてしまうような考えに陥ったことが何度もあると思います。聖書には、……しかないという固定観念から自由になれる大切な救いが述べられています。そして今日、皆さんにキリストは「それをここに持ってきなさい」と語りかけているのです。神に、そしてキリストに委ねて、もう一度キリストのみ手から受け取って生きようとする時、そこには信仰が生まれ、神の大いなる恵みの奇跡が訪れるのです。私にはこれだけしかない、足らなさや貧しさの現実を抱えていても、全てのことが可能である神は、この現実から新しいことへと繋げてくださるのです。この神を

私たちは訪ねましょう。

皆さんもこれまで悩んでいた自分の主観的な現実を、いったんキリストのみ手に委ね、そこからもう一度

受け取って出発してみましょう。神

はきっと皆さんに、新しい御業をくださることでしょう。

(きむそんじえ 在日大韓名古屋教会牧師 2010.12.3 チャペルアワー奨励)



## ある高校生の生涯が語りかける

森田喜之

わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神をご存知です。わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神をご存知です。彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛みつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去られてくださるよう、わたしは三度主に願いました。すると主は、「わたしの恵みにあなたは十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

(新約聖書 コリントの信徒への手紙二 12章1～10節)

今日、これから皆さんに紹介しようと思っている高校生、実は先月6月21日に17年の生涯を閉じました。たかひろという7人兄弟の末っ子で、彼の父は幼少の頃に病死しました。上のお兄さんたちの父親はまた別の男性で、この人も同じく病死でした。自宅で一緒に生活していたのは、お母さんが再婚した新しい3番目のお父さんでした。そんな中でたかひろ君は、何人かの兄弟といつも団子になって、幼稚園の頃から教会へと通うようになりました。そこは、私が名古屋に来る前にいた大阪の南部の教会でした。兄弟皆、とてもやんちゃで、ガラスが割れる音などがすると、そこにはたいていその兄弟がいるという始末で粗相が絶えませんでした。また、礼拝で話しをしていると、笑わせようとこちらに向かってヘンな顔をしてからかったり、本当に落ち着きのない様子の兄弟たちでありました。特に長男がそれを率先してやっていて、兄弟たちを見るや「うわ！また来よったわ」と、教会の大人たちも手を焼いていたようでした。

さて末のたかひろが小学校6年生の時、扁桃腺が腫れ医者にかかったのですが、なかなか腫れがひきませんでした。夏休みのキャンプで「ちょっとここ触ってみて！」、というので触れてみると、ごりごりした感触がありました。原因を調べるためあちこちの病院を巡りましたが、原因が解からず困っていました。そしてようやく母子医療センターとい

うかなり大規模な病院で、滑膜肉腫であることが判明しました。既そのときには、顎の下から首まで腫瘍が飛び出したように、かなり大きくなっていました。しかし、首は血管とか神経などが複雑に絡んでいますので、そのままの状態に腫瘍を除去することは不可能でした。

それで、放射線の照射や投薬で腫瘍を小さくしてから除去する方法で、治癒を試みる入院生活が始まったのです。

中学1年時の一年間は療養入院に費やされました。その闘病生活といえば、吐き気や抜け毛の副作用の苦しみが襲う劇薬を投与しなければいけないし、免疫力が著しく低下するため外出もままならず、彼をお見舞いする時は必ず滅菌してからといった状況でした。本来やんちゃな性格である彼も、見舞いに来た私に、なみだ目を見られないように横を向いて目を背け、言葉少なに話しをするのが精一杯でした。

入院生活で学校に通うことが出来ない代わりに、病院にある患者のための授業クラスがありました。小学生も中学生も全体で一つのクラスで勉強します。しばらくして、そのクラスを受けもつ先生が「たかひろがいてくれて助かっている」と言いました。同じクラスで学ぶ、自分よりもだいたい年下の幼い子どもたちが、自分と同様に副作用の痛みと闘いながらも、懸命に生きる姿を目の当たりにして、その子らを何とか励まそうと

彼なりに一生懸命世話をしていたそうです。ある日、笑いをもって患者を励まそうと病院を訪ねて周っているピエロがその病院に来たとき、その模様をNHKが取材していて、たかひろが子どもたちと本当に楽しそうに過ごす姿が映されていました。

その彼が1年後、手術の日を迎えました。手術日当日、私は無事を祈りながら彼を外で待ちました。お昼をはさんで、まる一日の大掛かりな手術でした。手術は無事終わりましたが、完全に腫瘍を取り除くことは出来ませんでした。やはり、神経や血管が複雑に絡み合った部位であったため困難を極め、結局その後も投薬治療を続けなければなりませんでしたが、なんとか学校には通うことが出来るまでになりました。

教会では年に2回ほど、お墓にて礼拝をする機会があるのですが、あるとき中学2年生だったたかひろが「僕も行く」と、ついてきました。その年頃で、お墓の礼拝に参加を希望したのは前にも後にも彼一人だけでした。礼拝が終わって皆が駐車場に移動した後、たかひろだけが独りぼつんと墓前にしゃがみ込んで、「僕もここに入っとったかもしれんねんなあ」と、しみじみ語っていたのを今でも憶えています。まだ年若い彼なりに、「人間の死」というものを強く感じて受け止めていたのでしょう。

そして中学を卒業し、高校に入學して陸上部に入部しました。けれども当然体力の問題でみんなと同じレ

ベルの練習にはついていけません。しかし、彼なりに必死になって参加していました。私が年に一度大阪に行く用事がてら、彼に会いにいくと、「自分が生きた証しを何か残したい」と熱く思いを語ってきました。もうあまり先が長くないことを、その時すでに悟っていたようでした。

高校生の年代で、人生まだこれからという年齢でありながら、いつ自分は死んでもおかしくないといった状況で生きていくのがどれほどのものか、当たり前健康体で生きている私たちにはとうてい計り知れませんが、彼は陸上部では十分に力を発揮できないので、自分に出来る何かを残したいと、地域の活動などに積極的に参加したりしていました。しかし、やはり療養中の身であるため、途中で入院を余儀なくされたりと、なかなかうまく継続することが出来ませんでした。何をやっても続かないと、兄弟にそのイライラをぶつけたり、葛藤しながらも、必死になって何かを残そうと求めていたのです。

先月の18日に彼から電話がありました。「また悪くなった」との知らせでした。のどの腫瘍がまた大きくなり始めたのです。それがのどを圧迫するため声を絞り出すように、そう私に告げました。そんなときでも彼は私に、「森田は元気なん？」と常にこちらを気遣うことも忘れません。「また電話してな、寂しいから」と言って電話をきりました。その2週間後、私は大阪で予定があったので、彼と会

うつもりでいましたが、電話の3日後にたかひろの悲報を受け、再会を果たすことは出来ませんでした。

こんな病気がなければ元気で生きていられたのにと、彼は何度も自分の境遇を口惜しく思っていたことでしょう。まだもう少し生きられたら、何か残すことを果たせたかもしれないと、悔やみながら息をひきとったかもしれません。けれども、その葬儀の日、陸上部の顧問の先生たち4人が参列しました。それから、たかひろが参加した地域活動の仲間も皆、参列していました。それら参列者は口々に、たかひろが闘病しながら必死になって生きていた姿に、大きな励ましを受けたと言いました。彼の模範的な姿勢は、自然と周囲の人々の心を動かし、ときに人々に自身の驕りを省みる機会を与えたりと、まさに何かを残していたのです。率先してやんちゃなことをしていた長兄も、たかひろの姿に励まされて更正し、今は立派に自立して仕事をしています。

病気、あるいはコンプレックス、弱さなどは誰もが少なからず抱えてい

(もりたよしゆき 名古屋中央教会牧師 2010.7.9 チャペルアワー奨励)

て、避けては通れない課題であります。恐怖も不安も皆無で、迷いもなく生きていられる人間なんて一人もいません。それがあっても、私たち一人一人にはもっと大切なものが与えられています。病気に侵されながらも、与えられた命を十分に全とうして生きようとした、たかひろの姿は大きな力となって周りの人たちに影響を与え、彼らの心に何かを残すことが出来ました。形ある何かは残せませんでした。彼の生涯そのものを通して、生きる意味を見つめる眼差しを残してくれました。

そのような力は、私たち一人一人にも実は与えられているはずのものです。辛い境遇や多忙で時間に追われるこの現代社会では、とかくそのことが覆われてしまいがちです。でも聖書に「私は弱いときにこそ強いからです」とありました。どのような状況にあっても、必死になって生きる意味を求めていくとき、大切な何かを私たちは見出すことが出来るのです。



## 新入生の皆さんへ

### 敬神愛人



(F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」  
イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを  
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最  
も重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分の  
ように愛しなさい。』-

(新約聖書 マタイによる福音書22章36～39節)

名古屋学院大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。  
皆さんは自分で選んだにせよ、大学に選ばれたにせよ、とにかくこの大  
学の学生となられたのです。皆さんはこれから勉強される大学につい  
て、どのようなことをご存知でしょうか。これからいろいろな機会に聞  
かれたり、読まれたり、学んだりされると思いますが、ここでも少しお伝  
えしておきたいと思います。

☆

私立の学校はそれぞれ独自の理念、「建学の精神」をもって建てられ、  
またそれを継承して運営されています。名古屋学院大学の「建学の精  
神」は「敬神愛人」です。これは冒頭に書かれています新約聖書の、イエス  
様の言葉から来ています。

人間は神を愛し敬うこと、そして自分を愛するように隣人を愛するこ  
と、この「敬神」と「愛人」を一番大切な掟として守らなければならないと  
いう、イエス・キリストの教えです。これは、ただ人と仲良くしなさいと  
いうヒューマニズムからだけでなく、神を敬うことによって成立する隣  
人愛です。これを教育の基本にしているのです。

☆

1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン(F.C.クラ  
イン)という宣教師がキリスト教の伝道と英語教育を目的として来日し

ました。そして横浜に英語学校、教会を創るなどの成果をあげ、彼が次の  
着任地として夫人と名古屋に来たのは1887年でした。そして名古屋に着  
いたその日から英語の学校を開いたのです。「愛知英語学校」と名づけら  
れた学校は「名古屋英和学校」と改称され、それがわが名古屋学院大学の  
基となりました。その時、クライン博士が教育の基本理念として掲げた  
のが「敬神愛人」でした。

☆

皆さんはこれから少なくとも四年間はこの大学の学生として勉強をし  
ていきますが、人間としての自らを成長させることにも励んでください。

そして私たちは祈っています。「敬神愛人」が示すように、皆さんが自  
分を愛するように他人を愛することができますように、また、人間の力  
を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認める、謙虚な人間  
へと成長を遂げることができますように。

### ◆ チャペルへの招き ◆

チャペルではチャペルアワーやカレッジアワーと称してキリスト教  
の礼拝の時間を設けています。教職員や近隣教会の牧師の奨励を聴き、  
賛美歌を歌います。大学は決して、皆さんにキリスト教の信仰を持たせ  
ようと考えているわけではありませんが、世界の大きな文化の源流の一  
つともいえるキリスト教に少しでも触れて、何かを感じていただければ  
と考えております。

<名古屋キャンパス>:チャペルアワー 火曜日12:40～13:10

カレッジアワー 木曜日12:40～13:10

<瀬戸キャンパス>:チャペルアワー 金曜日13:00～13:30

※詳しくはチャペル前の掲示板をご覧ください。

☆

その他チャペルでは音楽の集いや読書会など、様々な活動を行って  
います。またチャペルは原則としていつでも開いています。静かに落ち着  
きたいときはどうぞお気軽にご利用ください。祈りの場として黙想の場  
として皆様を招いています。